

## エミリー・ディキンソンのファシクル 24 と南北戦争

---

藤 村 希

---

南北戦争期のアメリカに生きるとは、いかなる経験だったのだろうか。Nathaniel Hawthorne は、戦下の 1862 年に *Atlantic Monthly* 誌 7 月号に寄せた “Chiefly about War-Matters. By a Peaceable Man” の冒頭、“There is no remoteness of life and thought—no hermetically sealed seclusion, except, possibly, that of the grave—into which the disturbing influences of this war do not penetrate” と述べた (403)。国家を二つに引き裂きアメリカ史上最大の戦死者を出すこととなる近代戦争は、Drew Gilpin Faust が明らかにしたように、死が生を支配する “republic of suffering” の内に、この国の人々すべてを巻き込むものだった (xiii)。

それは、隠棲の詩人として知られる Emily Dickinson においても例外ではなかった<sup>1</sup>。初期のディキンソン研究——例えば、Thomas H. Johnson の “she did not live in history and held no view of it, past or current” (xx) といった見解により強調された現実から切り離された詩人像は、同時代の社会的・文化的コンテクストのうちその生と作品を位置づける近年の研究によって修正され、ディキンソンと南北戦争との関わりも広く認められるようになった。手紙における南北戦争への言及や、北軍系の新聞に掲載された詩、先に引いたホーソン作品に三ヶ月遡る『アトランティック』誌 4 月号の記事 “Letter to

a Young Contributor”に依って始まる著者であり奴隷制度廃止論者の Thomas Wentworth Higginson との親交は、ディキンソンが戦争に無関心ではなかったことを示すものだ<sup>2</sup>。しかしその一方で、新聞に掲載された詩が自然をうたったものであったことにも見て取れるように、戦争を正面から直接に描くことは、ディキンソンにはまれだった。Daniel Aaron の *The Unwritten War: American Writers and the Civil War* (1973) や Shira Wolosky の *Emily Dickinson: A Voice of War* (1984) が先鞭をつけたこの分野の研究は、戦時と重なる 1861 年から 65 年にかけて、ディキンソンが危機の意識に苛まれながらその生涯の作品の半数以上を書いたことに注目し、詩人の心の内の葛藤と外の世界を覆う戦争との間に対応関係を見出した<sup>3</sup>。近年では、その詩句や題材からは必ずしも明確ではない南北戦争との関連が、ディキンソン作品のもつ豊かな多義性をもとにますます多くの詩について論じられてきている<sup>4</sup>。

本稿は、ディキンソンが自らの詩を清書して綴じたファシクル (fascicle) と呼ばれる 40 冊の手稿束のうち、第 24 のものを取り上げ南北戦争のコンテクストの中で考察する。このファシクル 24 には 1863 年前後のものとみられる 20 篇の詩が収められているが、そのうち二篇は詩人の親類や友人の戦死を経て書かれたことが明らかになっており、南北戦争を直接に扱った数少ないディキンソン作品の例である。ならば、その南北戦争との関連を踏まえた上で、ファシクル全体をどのように読むことができるだろうか。この考察にあたって、本稿では Sharon Cameron によるファシクル読解の方法を参照したい。キャメロンは、*Choosing Not Choosing: Dickinson's Fascicles* (1992) において、詩人が作品の解釈可能性を閉じなかったことを示すため、作品に添えられた他の詩句の選択肢であるヴァリエント (variant) に着目するとともに、同一のファシクル内の詩を互いに互いのコンテクストとして読むことによって、詩を単一のものとして読む際とは異なる意味がファシクルを通して生まれることを実践してみせた<sup>5</sup>。この方法は近年注目を集め、それを応用した新たな読解の試みが近刊の論集 *Dickinson's Fascicles: A Spectrum of Possibilities* (2014) に結実している。この中でファシクル 24 に言及したのものには、国家のみならずディキンソン家の「内乱」も映し出すものと論じた Martha Nell Smith の考察がある (130-49)。これに先立ち Cynthia Hogue は、2006 年の論文で同ファシクルをもとに、南北戦争目撃のトラウマを語る “poet of witness” としてディキンソンを提示している (40)。二人の論考は重要な指摘も含むものの、ともに取り上げているのはこのファシクル内の詩の半数に満たない。ファシクル 24 に収められた詩を

互いに応答させつつ読むとき、どのような解釈が生まれ得るか、その可能性の一端を示すのが本稿の目的である。それは、当時の社会が課したジェンダーの制約の中、極めて私的な詩を出版することもなく生涯書き綴ったと一般にとらえられてきた詩人像とは、異なるディキンソンの姿も浮き彫りにするだろう。

## ファシクル 24 とディキンソンの戦争詩

はじめに、ファシクル 24 の概要を確認しておきたい。Ralph W. Franklin の説に基づきこのファシクルに含まれる 20 篇の詩を綴じられた順に示すと、次のようになる<sup>6</sup>。

1. "It sifts from Leaden Sieves -" (F291); 2. "Like Mighty Foot Lights - burned the Red" (F507); 3. "A Pit - but Heaven over it -" (F508); 4. "A curious Cloud surprised the Sky" (F509); 5. "Of Brussels - it was not -" (F510); 6. "He found my Being - set it up -" (F511); 7. "Unto my Books - so good to turn -" (F512); 8. "The Spider holds a Silver Ball" (F513); 9. "Three times - we parted - Breath - and I -" (F514); 10. "There is a pain - so utter -" (F515); 11. "It troubled me as once I was -" (F516); 12. "A still - Volcano - Life -" (F517); 13. "When I was small, a Woman died -" (F518); 14. "This is my letter to the World" (F519); 15. "God made a little Gentian -" (F520); 16. "My Reward for Being - was this -" (F375); 17. "It always felt to me - a wrong" (F521); 18. "I tie my Hat - I crease my Shawl -" (F522); 19. "The Trees like Tassels - hit - and swung -" (F523); 20. "It feels a shame to be Alive -" (F524).

これらの詩は、1862年に書かれたとみられる F291 と F375 を含めて、63年春頃にディキンソンにより清書されファシクルとして綴じられたと考えられている。フランクリンはファシクルを“her own form of bookmaking”と呼び、作品を通常の形では出版しなかった詩人の、いわば自己出版であるとみなす (*Manuscript ix*)。しかし、創作順ではない何らかの意図をもって詩人がまとめたと思われるファシクルに、その内部の詩をつなぐ統一的な「物語」と言えるものがあるかという点に関しては、フランクリンを含む多くの研究者が懐疑的だ。キャメロンは、“unity is not produced by reading Dickinson’s lyrics in the fascicle context”と述べ、むしろファシクルはそのような統一性を疑問視するものであると主張している (4)。本稿もまた、ファシクルは統一的な「物語」を語るものではないと考える。それは次に確認する、このファシクルに収められた二篇の戦争詩の差異からも明らかになる。

「生きているのが恥ずかしく思える―」(F524)は、南北戦争との関わりが早くから指摘されてきたディキンソンの詩の一つである<sup>7)</sup>。ファシクル 24 内最後のこの詩は、冒頭で“*It feels a shame to be Alive - / When Men so brave - are dead -*”と、生きている者の恥の感情を勇敢な男たちの死と対置させた後、戦場での兵士の死を第二連と第三連で次のように語る。

The Stone - that tells defending Whom	石碑は語る―誰を守って
This Spartan put away	この剛勇のひとが放棄したのか
What little of Him we - possessed	私たちとともにあった―彼の存在の僅かなすべてを
In Pawn for Liberty -	自由の抵当として―
The price is great - Sublimely paid -	その代価は高く―壮大に支払われた―
Do we deserve - a Thing -	私たちは値するのにか―
That lives - like Dollars - must be piled	手に入れるには
Before we may obtain?	命が―ドルのように―積み重ねねばならないモノに―

ここで、兵士はその命を「自由の抵当」として戦争に差し出したと描かれる。「私たちは値するのにか」と問われる「モノ (a Thing)」とは、手に入れるために人命が「ドルのように」積まれるというこの「自由」のことにほかならない。奴隷解放の主張が席卷するマサチューセッツを中心とした北部においては、自由は戦争肯定の言説に用いられ、同時代の詩でも度々うたわれたものであった。例えば、『アトランティック』誌 1861 年 12 月号に掲載された Oliver Wendell Holmes の“*Union and Liberty*”は、“*Smite the bold traitors to Freedom and Law!*”のように「自由と法に対する反逆者」としての南部への攻撃を支持し、“*Union and Liberty! One Evermore!*”と繰り返す (757)。また、同誌 1862 年 2 月号の巻頭を飾った Julia Ward Howe の有名な“*Battle Hymn of the Republic*”は、“*As [Christ] died to make men holy, let us die to make men free*”と、福音主義的なレトリックで自由のための戦死へと人々を駆り立てる (145)。しかしディキンソンの F524 は、自由を得るために自由を享受すべき人間の命が軽んじられるという戦争が強いる価値の反転を、「モノ」や「ドル」の言葉によって批判的に浮かび上がらせる。Cristanne Miller は、戦争の言説に正面から取り組み挑戦しているとしてこの詩を評価し、“*Dickinson’s most important war poem*”と呼んでいる (152)。この詩の背景には、1862 年 3 月 14 日のノースカ

ロライナ州ニューバーンにおける Frazar A. Stearns の戦死がある。アマースト大学学長の息子であり最初に志願した学徒兵だったフレイザーとは、ディキンソンは兄 Austin の友人として親交があった。詩人は、いとこである Norcross 姉妹宛ての手紙に “His big heart shot away by a ‘minie ball’” と書き、友人の大きな存在がミニエ式銃弾という小さな鉛弾に奪われたことを嘆く (L255)。また、Samuel Bowles 宛ての手紙では、“Austin is chilled—by Frazer’s murder—He says—his Brain keeps saying over ‘Frazer is killed’—‘Frazer is killed,’ just as Father told it—to Him. Two or three words of lead—that dropped so deep, they keep weighing—” と記し、その死を伝える「二、三の鉛の言葉」によって、兄のみならず自らも銃弾に撃たれたような衝撃を受けていることを露にしている (L256)。

もう一篇の戦争詩「私が小さかった頃、一人の女の人が死んだー」(F518) も、兵士の死についてのものである。しかしその語り方は、F524 のそれとは大きく異なっている。

When I was small, a Woman died -	私が小さかった頃、一人の女の人が死んだー
Today - her Only Boy	今日ーその一人息子が
Went up from the Potomac -	ポトマック川から上っていったー
His face all Victory	彼の顔は勝利に満ちていた
To look at her - How slowly	母に会うためにーどれほどゆっくりと
The Seasons must have turned	季節はめぐってきたことだろう
Till Bullets clipt an Angle	銃弾が一角を削り取って
And He passed quickly round -	彼が素早く身をよじるまでー

この冒頭の二連で、銃弾に倒れた兵士の死は、先に逝った母との再会として描かれる。「ポトマック川から上っていった」と天に上ったことが示唆される兵士の顔は「勝利」に満ち、最終連 “I’m confident, that Bravoes - / Perpetual break abroad / For Braveries, remote as this / In Yonder Maryland -” でも、勇敢な死に喝采が永久に続くことを「私」が確信して、その描写は肯定的だ。しかし、この最後の “Yonder Maryland” に付された “Scarlet Maryland” のヴァリエーションとともに先の二連を見返すとき、第一連の最後に句読点がなく、“His face all Victory To look at her -” と続く「勝利」の所在が曖昧になる。この詩の

背景は Benjamin Friedlander の論に詳しい。1861 年 10 月 21 日、ヴァージニアとメリーランドの州境ポトマック川沿いでのボールズ・ブラフの戦い (Battle of Ball's Bluff) で戦死した Francis H. Dickinson は、詩人の遠縁にあたり、南北戦争で戦死した最初のアマースト地域の出身者とされる (1585)。北部が大敗を喫したこの戦いで、フランシスは爆破により両脚を失う凄惨な死を遂げたという。さらに、彼が母の「一人息子」ではなく、この母の死が詩人 23 歳の時の「私が小さかった頃」とは言い難いものであったことを知るとき、フリードランダーがこの詩の描写を “mythological” なものと呼ぶのも頷ける (1589-90)。F518 においては、詩人は事実を積極的に虚構化することによって戦死を称揚し、戦争の言説をむしろ支持していると言える。

以上確認してきたように、F518 と F524 はともに南北戦争を直接にうたった詩ながら、戦争について異なる態度を示すものである。これらを収めるファシクルは、それゆえ、統一的な「物語」を語るものとはならない。こうしたディキンソンの南北戦争期の作品の特徴についてフリードランダーは、戦争を理解し作品で表現しようとする葛藤ゆえに複数の相矛盾する反応を含むものとなっていると指摘する (1583)。また、詩人の心の内で戦われる信仰の問題と外界で繰り広げられる南北戦争との間に照応を見るウォロスキーは、“Emily Dickinson's texts are battlefields between contesting claims of self and community, private and public interest, event and design, metaphysics and history, with each asserted, often against the other” として、その作品が相反するものの争う「戦場」であると述べている (“Public” 127)。ディキンソンは、ファシクル 24 をまとめたのと同時期の 1863 年 2 月の手紙で、“War feels to me an oblique place” と述べた (L280)。以下の読解は、F518 と F524 の南北戦争との関わりをコンテキストとすると、ファシクル 24 に収められた詩が、互いに響き合いながら戦争に対する詩人の「斜め」からの応答を浮かび上がらせることを確認するものとなる。

## 歪む現実と遍在する戦争

南北戦争がディキンソンとその詩に与えた影響について、ウォロスキーは、“The trauma of the war put extraordinary pressure on the norms, and fundamental faiths, that had promised to structure Dickinson's world and render it meaningful. The result is a work deeply marked by the strains of reality around

her and their implications for poetic expression and, specifically, for poetic language”と述べている (“Public” 109)。このような戦争のトラウマによる詩人の認識と表現における「現実の歪み」を映し出すものに、自然を題材とした詩がある。

ファシクル 24 巻頭の「それは鉛の篩から落ちる―」(F291)、5 番目の「ブリュッセルからのもの―ではなかった―」(F510)、15 番目の「神は小さなリンドウを創られた―」(F520)、および 19 番目の「木々は房のように―打ち付け―揺れた―」(F523) は、季節を表現した詩である。F291 が鉛色の空から降るすべてのものを覆う雪を、F510 がブリュッセル産の絨毯にも比せられる地面に広がる褐色の松葉を、F520 が夏と冬の間の霜の降りる時期に咲くリンドウを、F523 が風に木々の揺れ花の咲く夏の日を描いているように、各詩の戦争との関連は希薄である。しかし、これらをファシクルの中で読むとき、四篇という数から期待される四季に対応した詩ではなく、秋の詩が二篇ある一方で春の詩のないことが浮き彫りになる。スマスは、F520 には言及しないものの、その他三篇の詩が冬から秋を経て夏へと季節を逆行するものであることを指摘している (136)。これら四篇の詩は、ファシクル 24 では季節が完全にはめぐらず、時間が正常には進んでいないことを示唆している。

自然を題材とした詩には、風景を描写したものもある。Faith Barrett によれば、ディキンソンの風景詩にはロマン派的な風景描写に殺戮の描写を重ねて戦争の暴力を描く “landscapes of war” と呼べる一群の詩があり、ディキンソンのみならず同時代の風景詩において、戦場の流血を連想させる色として赤が度々用いられた (143-60)。バレットの論考では言及されないものの、ファシクル 24 の「強い脚光のように―赤が燃えた」(F507) は、そのような詩の一つと言える。ここで、“Like Mighty Foot Lights - burned the Red / At Bases of the Trees - / The far Theatricals of Day / Exhibiting - to These -” とうたわれ、舞台の脚光に喩えられる夕陽の赤さは、「その日一日の遠い場所での芝居」を眼前の「木々の根元」に照らし出す。この詩が書かれたとみられる 1863 年春までに、二万三千を超える死傷者を出し南北戦争中最も流血にまみれた一日とされる前年 9 月 17 日のメリーランド州北部におけるアンティータムの戦いのような激戦も繰り広げられていた。戦地の死屍累々の様を記録した写真はなお多くの一般市民の目に触れることはなかったものの、新聞や雑誌は版画による図版を掲載し戦況を広く報道した (Faust xv-xvii, 275)。F507 の赤い夕陽は、先に見た F518 最終行のヴァリエントである「緋色のメリーランド」とい

う言葉とも、また「私の本に向かうのは—とても良いこと—」(F512)に現れる“Far feet of failing Men”という一節とも響き合いながら、倒れる兵士たちの血に赤く染まった戦場という「遠い場所での」光景を浮かび上がらせる。風景描写の詩にはもう一篇、「奇妙な雲が空に突如現れた」(F509)がある。この詩における雲の描写は、“A curious Cloud surprised the Sky, / 'Twas like a sheet with Horns; / The sheet was Blue - / The Antlers Gray - / It almost touched the Lawns. // So low it leaned - then statelier drew - / And trailed like robes away . . .” というものである。これは、青く広がる空に突如戦火による灰色の煙が上り風にたなびく様を思わせるとともに、「ほとんど芝地に触れる」位置での青と灰色の対比によって、戦場に展開する北軍と南軍の軍服も想起させる。この二篇の風景詩において、ディキンソンは戦場の光景を眼前の風景に投影するのだ。

これら季節や風景を描く自然詩が明らかにするのは、とりもおさずファシクル 24 に南北戦争の影響が遍在することなのである。

### 貫通するイメージ

このようなファシクル 24 の中心には、苦痛がある——中央にあたるファシクル内 10 番目の短詩「あまりにも徹底的な—苦痛がある—」(F515)が、“There is a pain - so utter - / It swallows substance up - / Then covers the Abyss with Trance - / So Memory can step / Around - across - upon it - / As One within a Swoon - / Goes safely - where an open eye - / Would drop Him - Bone by Bone -” とうたうように。詩人の状況を比喩的に表現したこの詩で、大きな苦痛に飲み込まれた人間は、戦場に散らばる死体のような肉体の分断を記憶の分断によって辛うじて免れている。これは、戦争を直線的な時間軸に沿った「物語」として語ることを阻み、強迫的に反復されるイメージに分裂させる。

実際、ファシクル 24 には苦痛の中にある生を主題とする詩が頻出し、「奈落—でもその上には天国—」(F508)、「彼は私の存在を見つけて—立たせた—」(F511)、「それはかつて私を悩ませた—」(F516)、「静かな—火山の—一生—」(F517)、「私にはいつも思われた—間違ったことだと」(F521)がこれにあたるが、なかでも繰り返し現れるのは、戦場での銃撃や爆発と繋がるイメージである。例えば F508 では、“A Pit - but Heaven over it - / And Heaven beside, and Heaven abroad; / And yet a Pit - / With Heaven over it” と、天が至る所に存在すると見えても奈落は消えず、そこでは生が “we got a Bomb - / And held it in our



Bosom -”のように、一触即発の爆弾を胸に抱えたものとなる。また F517 では、“A still - Volcano - Life -”、“A quiet - Earthquake style -”と、その生は表面的には静かでも火山の噴火や地震といった大災害を予感させる。*Harper's Weekly* 誌 1861 年 5 月 4 日号は、南北戦争の火蓋を切った同年 4 月 12 日の南軍によるサムター要塞砲撃を火山の噴火として描く図版を表紙に掲げており (Fuller 10)、詩人がそれを目にして火山に戦争の連想を込めた可能性は、隣家に住む兄オースティン夫妻がこの雑誌を定期購読し、両家の間で雑誌が交換されたという伝記的事実からも (Barrett 174)、F517 に現れる “The North cannot detect” の一節からも、強く示唆される。

「蜘蛛は銀のボールをかかえる」(F513) は、一見したところ戦争との関連が窺えない詩である。しかしここでは、このような作品にも南北戦争への詩人の応答が見られることを、「三度—私たちは別れた一息と—私は一」(F514) とともにファシクルに綴じられた状態にも検討を加えて示したい。この二篇の詩は、ファシクル 24 の中で 8 番目と 9 番目に該当し、ディキンソンの手稿では見開きのページの左右に書かれている (*Manuscript* 542-44)。

The Spider holds a Silver Ball	蜘蛛は銀のボールをかかえる
In unperceived Hands -	人目にはつかない手に—
And dancing softly to Himself	そしてひとり静かに踊りながら
His Yarn of Pearl - unwinds -	真珠の糸を一解き放つ—
He plies from nought to nought -	彼は無から無へと行き来する—
In unsubstantial Trade -	実体のない仕事をして—
Supplants our Tapestries with His -	私たちのタペストリーを彼のものに取り替える—
In half the period -	半分の時間で—
An Hour to rear supreme	一時間で素晴らしく築き上げる
His Continents of Light -	彼の光の大陸を—
Then dangle from the Housewife's Broom -	そして主婦の箒からぶら下がる—
His Boundaries - forgot -	彼の境界を—忘れて—
***	***
Three times - we parted - Breath - and I -	三度—私たちは別れた一息と—私は一—
Three times - He would not go -	三度一息は離れて行こうとせず—

But strove to stir the lifeless Fan	生氣のない羽根を動かそうとした
The Waters - strove to stay.	水の流れを一押し止めようとした。
Three times - the Billows threw me up -	三度一大波は私を放り上げた—
Then caught me - like a Ball -	それから私を捕えた—ボールのように—
Then made Blue faces in my face -	それから私の顔に青い顔を浮かべた—
And pushed away a sail	そして数リーグ先を進んでいた船を
That crawled Leagues off - I liked to see -	押しやった—私は見るのが好きだった—
For thinking - While I die -	思考のために—私が死ぬ間に—
How pleasant to behold a Thing	人間の顔が—あるべきところに
Where Human faces - be -	モノを見るのはどれほど愉快か—
The Waves grew sleepy - Breath - did not -	波は眠たげになり—息は—そうならなかった—
The Winds - like Children - lulled -	風は—子供のように—静かになった—
Then Sunrise kissed my Chrysalis -	それから日の出が私の蛹に口づけをして—
And I stood up - and lived -	私は立ち上がって—生きた—

蜘蛛が銀の「ボール」をかかえるという F513 の奇妙な表現は、ファシクルの中で隣り合った詩として読む際、F514 で再度現れる「ボール」の語に読者の注意を引かずにはいない。F513 の小さな蜘蛛よりもさらに小さな「ボール」は、「光の大陸」と広大なイメージを付与された蜘蛛の巣を紡ぎ出す元となるが、それは人間の持つ箒に払われ無に帰してしまう。一方、F514 の臨死体験の中の「私」は、大波に翻弄される「ボール」のように小さく無力なものとなり、虫のように「蛹」となって生き返る。これら二つの詩に現れる「ボール」の語は、大と小、有と無、人間と虫とを反転させながら結び付ける。

さらに「ボール」の語が、先に見た二篇の戦争詩の背景——フランシス・ディキンソンが爆破に倒れたボールズ・ブラフ (Ball's Bluff) の地、フレイザー・スターズを撃ち抜いたミニエ式銃弾 (minie ball) ——とも関わるものだったことを思い出してみれば、ファシクルのほぼ中央に綴じられた二つの詩に「ボール」の語が現れるのは単なる偶然とは思われない。F514 において、「私」の顔に浮かぶ複数の「青い顔」とは、彼ら青い軍服の戦死者の顔を指してはいないだろうか。顔のあるべきところに現れる「モノ」とは、「私」と彼らが判

別不能となること、それを「愉快」と呼ぶ「私」の正気が失われることを示唆してはいまいか。つまり、「私」はここで、彼らとともに「死ぬ」のではなからうか——フレイザーの死の報せが「鉛の言葉」となって詩人を撃ったように。何より F513 の「銀のボール」という表現が、弾丸を思わせはしないだろうか。そして、それによって生み出される「大陸」の「実体」のなさを揶揄してはいないだろうか。南北の「境界」もこの詩の蜘蛛の巣同様に、住人を失えばその価値が失われてしまうものにすぎないのだ。それは、「私の存在への報酬は—これだった—」(F375) において、“Realms - just Dross -”, “Empire - State - / Too little - Dust -” と、領土や国家が無価値とされることも響き合う。このように、「ボール」の語も喚起する戦場のイメージは、苦痛に満ちたファシクルを貫通するのである。

## ファシクル 24 における個人と戦時の共同体

しかし、詩人を飲み込む苦痛のような個人の感情は、ファシクル 24 において詩人が戦時の共同体に思いを馳せ語りかける立脚点ともなるものである。本稿冒頭で確認した F524 も、戦死者への「恥」の感情をもとに、人命を「ドル」のように積んで得られる「自由」の価値を「私たち」に問うものだった。この個人と戦時の共同体の主題は、「私は帽子を結わえ—ショールをたたむ—」(F522) においては、次のような冒頭の二連から展開される。

I tie my Hat - I crease my Shawl -  
Life's little duties do - precisely -  
As the very least  
Were infinite - to me -

私は帽子を結わえ—ショールをたたむ—  
生活の中のちいさな務めを果たす—正確に—  
最もちいさなことが  
私にとって—無限のものであるかのように—

I put new Blossoms in the Glass -  
And throw the Old - away -  
I push a petal from my Gown  
That anchored there - I weigh  
The time 'twill be till six o'clock -  
So much I have to do -  
And yet - existence - some way back -

私は新しい花を花瓶に挿して—  
古くなった花を一捨てる—  
私のガウンからそこに付いていた  
花びらを払う—私は時間を  
六時になるまではかる—  
そんなにもたくさん私にはなすべきことがある—  
けれど—存在は—少し前に—止まってしまった—

Stopped - struck - my ticking - through - 私が時を刻む音を一消して—しまった—

この詩において、「私」の外部で時間は流れ「六時」になる。しかし、その内部では「時を刻む音」が消え、「私」の存在は「止まって」しまっている。先に確認した季節をうたう詩がファシクル24全体について示唆するように、正常な時間の流れから切断された南北戦争のトラウマの中を、「私」は生きているのだ。戦争が価値の反転を強いることを前述したが、この詩においても「最も小さいこと」、すなわち、衣服を整え花の世話をするような日々なすべきことを正確に積み重ねることこそが、「私」の生を支える「無限のもの」となる。しかし、この「私」の非常に個人的な日常から始まる詩において、第三連の冒頭で “We cannot put Ourselves away / As a completed Man / Or Woman -” と、視点が男女の「私たち」へと広がることに注目したい。最終連 “Therefore - we do life’s labor - / Though life’s Reward - be done - / With scrupulous exactness - / To hold our Senses - on -” にも示されるように、「止まってしまった」存在を「片付けてしまうことなどできない」まま日々を送る、「私」もまたそのひとりである傷ついた男たち、女たちに、ともに日々の務めを正確に積み重ねることを「私」は静かに促している。それは、戦下に一層の厳しさで彼我を峻別し人々を死に向かわせるナショナリズムの言説——例えば、先に引用したホームズの詩が「自由と法に対する反逆者」を討てと命じ、ハウの詩が「人を自由にするために死のう」と誘う、「我々」への語りかけとは異なるものである。共同体を覆う南北戦争のトラウマの中で、ただ「私たちの正気を保つ」ために、「私」は「私たち」に思いを馳せ語りかける。

最後に、本稿の結びとして「これは世界への私の手紙です」(F519)を取り上げる。

This is my letter to the World	これは世界への私の手紙です
That never wrote to Me -	私に一度も手紙をくれたことのない世界への—
The simple News that Nature told -	それはやさしい威厳とともに
With tender Majesty	自然が語ったシンプルなニュース—
Her Message is committed	自然のメッセージは
To Hands I cannot see -	私には見えない手に託されます—
For love of Her - Sweet - countrymen -	自然への愛のために—親切な—同胞のみなさん—

「これは世界への私の手紙」とうたうこの詩は、ディキンソンの死後ヒギンソンと Mabel Loomis Todd の編集により 1890 年に出版された最初の詩集の巻頭詩とされたことにも示されるように (Dickinson, *Poems* 528)、「これ」の語によってこの詩とともに綴じられた詩を俯瞰して一つのまとまりとして指す、詩人の作品の中でも特異なものと言える。ファシクルを通した読解を試みてきた本稿は、「これ」をファシクル 24 の全体を指すものとして捉えたい。ここで「私」は、「自然が語ったシンプルなニュース」を「同胞のみなさん」に託すと言う。しかし、ファシクル 24 が「私の手紙」として差し出すものは、この詩の表向きのシンプルさのままの「シンプルなニュース」では決してなかった。これまでの議論で確認してきたとおり、ファシクル 24 の自然を題材とした詩は、季節がめぐむることを止め時が正常には進まない中で、遠い戦場の光景を眼前の風景に投影する、南北戦争の影響が遍在することを示すものであった。また、戦場の銃撃や爆発のイメージに貫かれた苦痛に満ちた詩群は、兵士の死を戦争の言説に対する批判と支持の相反する態度で描くとともに、ひとり個人のトラウマに孤立するだけでなく、共同体そのものが南北戦争のトラウマの中にあることを見据え、そこで日々を送る人々の苦痛にも思いを馳せるものであった。

その一方で、F519 において「同胞のみなさん」と語りかけながら、通常の形で作品を出版しないことを選択した詩人は、「私の手紙」を受け取るはずのその人々の手が「見えない」。作品冒頭の「これ」の語の、他の詩を俯瞰し統一する役割も、この詩がファシクル 24 内では 14 番目という目立たない位置に置かれることで、ディキンソン自身によって示唆されながらも意図的に打ち消されてもいる。「多から成る一」というアメリカの国家統一の「物語」が、まさにその国家を二分して相争う人々の夥しい流血とともに深く引き裂かれた南北戦争の時代に、ホームズやハウの詩があくまでもその「物語」を拠る所に戦争の言説を支持するのに対し、「主に戦争について」を分裂する国家を映す本文と注に分裂したテキストとして書き上げたホーソンと同様に、ディキンソンはその「物語」を疑いなく信じることはできなかったのだ。ファシクルの役割は、統一的な「物語」を語るのではなく、そのような「物語」を相対化し、複層化してみせることにこそある。南北戦争期を生きる経験がディキンソンに強いた葛藤と苦痛を、矛盾をはらむ断片のまま描いてみせるファシクル 24 の 20 篇の詩は、そのことを何よりも浮かび上がらせる。そして、この点におい

てこそ、ファシクル 24 は南北戦争に対するディキンソンの「斜め」からの応答となるのである。

## 註

本稿は、科学研究費補助金・若手研究 (B) 「ホーソーと南北戦争前のコンテキスト——ジェンダーの観点からの研究」(研究課題番号: 23720151) の成果の一部である。

- <sup>1</sup> ディキンソンの詩からの引用は *The Poems of Emily Dickinson: Variorum Edition*, ed. R. W. Franklin, 3 vols (Cambridge: Harvard UP, 1998) により、かっこに F と詩番号を記す。手紙からの引用は *The Letters of Emily Dickinson*, ed. Thomas H. Johnson, 3 vols (Cambridge: Harvard UP, 1958) により、かっこに L と手紙番号を記す。
- <sup>2</sup> Dandurand、Wineapple、金澤を参照。
- <sup>3</sup> Aaron 355-56、Wolosky、*Voice* を参照。
- <sup>4</sup> こうした研究の一例として、Barrett 130-86、Bennett、Miller 147-75、Smith を参照。
- <sup>5</sup> Cameron, esp. 3-46 を参照。
- <sup>6</sup> 本稿は、ファシクル 24 とファシクル内の詩についてフランクリンの説に倣う。以下、これらに関する情報は、Franklin, *Manuscript* 533-60、Dickinson, *Poems* 311-14, 399-400, 518-33 を参照。手稿の一部失われている F508 と F522 の一部が記載された用紙 (*Manuscript* 555) の扱いについては、フランクリンの *Editing* 40-46、および “Houghton” も参照。なお、従来のジョンソン版詩集ではダッシュで表記されたディキンソン詩で多用される句読記号についても、フランクリン版詩集に倣いハイフンを用いて表記する。
- <sup>7</sup> この詩の伝記的背景と解釈に関しては、Barrett 170-73、Miller 150-52、Wolosky, “Public” 118-20 および *Voice* 68-72、金澤 134-35 に負うところが多い。

## 引用文献

Aaron, Daniel. *The Unwritten War: American Writers and the Civil War*. 1973. Tuscaloosa: U of Alabama P, 2003. Print.

- Barrett, Faith. *To Fight Aloud Is Very Brave: American Poetry and the Civil War*. Amherst: U of Massachusetts P, 2012. Print.
- Bennett, Paula Bernat. "Looking at Death, is Dying': Fascicle 16 in a Civil War Context." Crumbley and Heginbotham 106-29.
- Cameron, Sharon. *Choosing Not Choosing: Dickinson's Fascicles*. Chicago: U of Chicago P, 1992. Print.
- Crumbley, Paul, and Eleanor Elson Heginbotham, eds. *Dickinson's Fascicles: A Spectrum of Possibilities*. Columbus: Ohio State UP, 2014. Print.
- Dandurand, Karen. "New Dickinson Civil War Publications." *American Literature* 56.1 (1984): 17-27. *JSTOR*. Web. 1 Oct. 2014.
- Dickinson, Emily. *The Letters of Emily Dickinson*. Ed. Thomas H. Johnson. 3 vols. Cambridge: Harvard UP, 1958. Print.
- . *The Poems of Emily Dickinson: Variorum Edition*. Ed. R. W. Franklin. 3 vols. Cambridge: Harvard UP, 1998. Print.
- Faust, Drew Gilpin. *This Republic of Suffering: Death and the American Civil War*. New York: Vintage, 2008. Print.
- Franklin, Ralph W. *The Editing of Emily Dickinson: A Reconsideration*. Madison: U of Wisconsin P, 1967. Print.
- . "The Houghton Library Dickinson Manuscript 157." *Harvard Library Bulletin* 28 (July 1980): 245-57. Web. 7 Oct. 2014.
- , ed. *The Manuscript Books of Emily Dickinson*. 2 vols. Cambridge: Harvard UP, 1981. Print.
- Friedlander, Benjamin. "Emily Dickinson and the Battle of Ball's Bluff." *PMLA* 124.5 (2009): 1582-99. Print.
- Fuller, Randall. *From Battlefields Rising: How the Civil War Transformed American Literature*. Oxford: Oxford UP, 2011. Print.
- Hawthorne, Nathaniel. "Chiefly about War-Matters. By a Peaceable Man." *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne, Miscellaneous Prose and Verse*. Ed. William Charvat et al. Vol. 23. Columbus: Ohio State UP, 1994. 403-42. Print. 23 vols.
- Hogue, Cynthia. "lives - like Dollars': Dickinson and the Poetics of Witness." *The Emily Dickinson Journal* 15.2 (2006): 40-46. Web. 1 Oct. 2014.
- Holmes, Oliver Wendell. "Union and Liberty." *Atlantic Monthly* 8 (Dec. 1861): 756-

57. *Making of America*. Web. 24 Nov. 2012.
- Howe, Julia Ward. "Battle Hymn of the Republic." *Atlantic Monthly* 9 (Feb. 1862): 145. *Making of America*. Web. 24 Nov. 2012.
- Johnson, Thomas H. Introduction. Dickinson, *Letters* xv-xxii.
- Miller, Cristanne. *Reading in Time: Emily Dickinson in the Nineteenth Century*. Amherst: U of Massachusetts P, 2012. Print.
- Smith, Martha Nell. "Civil War(s) and Dickinson Manuscript Book Reconstructions, Deconstructed." *Crumbley and Heginbotham* 130-49.
- Wineapple, Brenda. *White Heat: The Friendship of Emily Dickinson and Thomas Wentworth Higginson*. New York: Anchor Books, 2009. Print.
- Wolosky, Shira. *Emily Dickinson: A Voice of War*. New Haven: Yale UP, 1984. Print.
- . "Public and Private in Dickinson's War Poetry." *A Historical Guide to Emily Dickinson*. Ed. Vivian R. Pollak. Oxford: Oxford UP, 2004. Print.
- 金澤淳子 「詩人と南北戦争——定期刊行物に見る戦争詩とエミリー・ディキンソン」 『アメリカ研究』 34 (2000) : 123-39。



## Emily Dickinson's Fascicle 24 and the Civil War

---

Nozomi Fujimura

---

This paper examines Emily Dickinson's Fascicle 24 in the context of the Civil War. Although early scholarship considered Dickinson—a reclusive poet—as severed from the reality contemporary to her, later studies have situated her in the social and cultural context of her time. As a result, the impact of the Civil War on herself and her poetry, as well as her attempt to express it in various ways, have come to receive more scholarly attention. With regard to Fascicle 24, two of its poems have been previously discussed in terms of the Civil War. However, the question of how we can read the whole fascicle in the same context has not been fully answered. In this paper, I attempt to show one possible reading, utilizing the way of reading Dickinson's fascicles presented by Sharon Cameron.

At the beginning of the discussion, I provide an overview of Fascicle 24: it consists of twenty poems thought to have been put together by Dickinson around the spring of 1863. By reviewing the two war poems, "It feels a shame to be Alive -" and "When I was small, a Woman died -," I underscore their different attitudes toward the Civil War. This analysis prepares the context through which the other poems in the fascicle are explored. The Civil War imposed strains on Dickinson, leading to the anomalous representations of the world around her. The four poems on the

season—"It sifts from Leaden Sieves -," "Of Brussels - it was not -," "God made a little Gentian -," and "The Trees like Tassels - hit - and swung -"—reflect such anomaly by implying the seasons do not revolve. Her landscape poetry shows another type of anomaly: "Like Mighty Foot Lights - burned the Red" and "A curious Cloud surprised the Sky," in tandem with "Unto my Books - so good to turn -," present landscapes onto which scenes in the battlefield are projected. Such poems as "There is a pain - so utter -," "A Pit - but Heaven over it -," "He found my Being - set it up -," "It troubled me as once I was -," "A still - Volcano - Life -," and "It always felt to me - a wrong" repeatedly depict lives in pain often by means of battlefield imagery. Meanwhile, "The Spider holds a Silver Ball" and "Three times - we parted- Breath - and I -" are closely connected with the two war poems through the word "ball." These, together with "My Reward for Being - was this -," challenge the wartime discourse that puts human lives below such notions as freedom and state. "I tie my Hat - I crease my Shawl -" addresses not only the personal but also the communal trauma of the war. "This is my letter to the World," despite its seeming simplicity, suggests that the letter's contents offer the complex visions presented throughout Fascicle 24. Without providing one single unifying story, Dickinson presents fragmentary visions of the wartime, telling them obliquely.